

昔の暮らし聞き取り隊 聞き書き集 ⑦

平成 27 年 6 月 発行

元喜茂別町長 (S59. 07. 23～S63. 07. 22)

こん やす のり
金 恭 範 さん

昭和 4 年 (1929年) 6 月 15 日生 86 歳

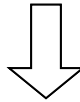
『全てに感謝して』
～昔の仕事を振り返る～



喜茂別町教育委員会

「聞き書き」とは？

- ◇「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。
- ◇「聞き手」が「話し手」の方のお宅などにおじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。
- ◇後でその録音を聞きながら、できるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。
- ◇それを本人に、確認や修正をしてもらいます。
- ◇「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。



- ◎その人の経験や努力から、生きる知恵を学んだり、自分のこれからの人生に活かしたりすることができるかもしれません。
- ◎その人の人生を知ることにより、理解が深まり、支え合うことの大切さや、人と交流することの楽しさを伝えてくれるかもしれません。

一 生い立ち

自分は旭川で生まれたんです。両親はともに秋田の生まれで、北海道へ移住してきたんです。その前に伯父が永山村（現・旭川市永山地区）の地方農事試験場の職員だったんで、それで私の親を旭川に呼んで、町村農場の系列だったと思うんだけど、牛の手入れをやっていました。兄貴が大正 15 年生まれで自分が 2 歳の頃に登別にきているから、大正 13 年頃に旭川にきたんだと思います。それから伯父が親父に、「これから子どもがたくさん生まれるんだから、こういう仕事では子どもを育てられないから農業をやれ。」と。そのうちに伯父が永山から早来（現・安平町）の火山灰地農事試験地に移ったんで、そっちに引っ張ろうと思ったんだけど場所が無くて、今の登別市、当時の幌別町ほろべつにきて農業を始めたんです。

登別には、自分が小学校 5 年生の頃までいましたね。そこで農業をやっていたんですけど、北海道が北海道曹達幌別工場ソウダを作るからということで、たまたま街の近くだったから用地買収にあったんです。それで止む無く、そのときに伯父が農事試験場倶知安試作場ねっぶに転勤になっていたから、後志で土地を探した結果、当時の熱郭村（現・黒松内町熱郭地区）に空き地があるからそこに入らないかと。すこぶる土地代も安かったからね。昭和 15 年だね。小学校を卒業して高等 2 年を終えて、そのあと熱郭から倶知安農学校（現・倶知安農業高等学校）まで汽車で通ったんです。当時は片道 1 時間 40 分位かかったね。熱郭発が 5 時 24 分だった。家から駅まで 3 km 位あったね。家は黒松内町字大谷地おおやちとって、白井川地区しろいかわから少し街寄りにあったんです。農学校には農科と林科の 2 つしかなくて、自分は農科でした。

ニセコと蘭越の間にトンネルがあったんですけど、高校 3 年生の初めに崩落して、汽車で通えなくなってね。そのときは自分も物好きだったから、昆布かりぶとから本を背負って、ニセコ、当時は狩太町と

言って、そこまでの間を歩いてから倶知安農高まで通いましたね。でも通学が大変だったので、当時学校に寮が5つ位あったから寮に入れてくれて頼みましたね。高校には実習畑が25町歩（1町は約1ha）あって、それを当時はほとんど手で起こしていたんです。馬が2頭いたけど全部は間に合わないから。作物は主に馬鈴薯でしたね。

入学した昭和19年当時は校舎が無かったです。農学校だから宿舎や作業庫が先にできていました。だから我々の校舎って言うのは作業庫です。後ろに農具があつて、天井なんか無い。それでも学校と同じで黒板はあつて、床は板が張ってるからそこに机をおいてね。40人クラスだったけど、当時農家から中等学校に通う人なんていなかったね。女子はだいたい小学校6年生で終わっていたしね。

自分は7人兄弟の次男でした。戦時だから兄貴は親の跡を継ぐ。だけど弟にやるだけの土地は無い。そのためにはやっぱり弟には教育をして月給取りにしなければだめだ、と言うのが兄貴の方針だった。それで兄貴は家業を継いだんだけど、たまたまトラクターの下敷きになって亡くなったんです。そのとき自分はもう喜茂別に来ていたし戻って農業できるほどの能力も無かったから、そのままその土地は売ろうと言うことになったんだよね。

一 喜茂別村農地委員会へ就職

農学校を昭和22年に卒業して、どこかで就職できるところがないかと、伯父に頼んでたんです。たまたま喜茂別の阿部清さん（のちの喜茂別農協組合長）が伯父と一緒に農事試験場倶知安試作場で勉強していたんです。^{みずほ}瑞穂という高台で。それで伯父が阿部さんに喜茂別でどっか使ってくれとこないかと頼んで。たまたまそのときにGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の命令で農地改革をやら

なければならぬ、そのために職員を採用しなければならぬということで、喜茂別に来たんです。昭和 22 年 7 月に喜茂別村農地委員会（現・農業委員会）に採用になったんです。当時役場には 20 人もいなかったね。

農地改革って言うのは、喜茂別から他の市町村に行っている不在地主の農地はGHQの命令で政府が買い上げる。在村地主でも基準以上の面積を小作人（①）に貸していればそれも政府が買い上げる。そしてそれを小作人に売り渡すという制度だったんです。喜茂別は割合小作人が多かったんです。でも当時 17 歳だったから何をやっていいかわからないし、面食らったね。

※①小作人：農地の地主から農地を借り、小作料を支払って農業を行う農家のこと。小作農。

事務所は役場の中には入れなかったから、役場の棟続きの裏に空き部屋があって、それを農地委員会の事務局にしたんです。事務局長には戦時中村長だった鈴木仁治郎さん（第 11 代村長）がなつたんです。当時公職追放令にじろうといって、特定の役人はGHQの指令で失職してそのまま働き続けることはできなかつたんだ。鈴木さんもそれで失職した人でした。



鈴木仁治郎さん

事務局職員は鈴木さんと自分の 2 人だけでした。今まで村長で、公職追放令で失職して、今度は農地委員会で事務局長、一般事務だからね。けどお陰様で自分も随分面倒見みてもらったから楽に仕事ができましたね。本当に感謝しています。

鈴木さんは実務は慣れたもんでしたね。自分は字が上手でないから、しかも今みたいに機械なんてさらさら無くて全部自筆するんだから。そして何軒かに同じ文書配らなければならぬときは、印刷

機なんて便利な物もないから、カーボン紙で複写して何回も書きましたね。

一 農地改革の仕事に従事

農地委員会に5年位いました。苦労したのは、買収した土地は登記しなければならないんですけど、その登記所はこの辺では10km離れた留寿都村でした。乗り物なんて何も無いですから。自転車すらない。だからみんな往復歩き。歩くのは若い者がやらなければならない。そして国からは一定期間内に買収、売り渡し、登記を完了すると、完了しない者は沖縄に流すと言われて気合かけられましたね。そのときまだ沖縄は日本の領土ではなかったから（昭和20年太平洋戦争からアメリカ軍施政権下におかれ、昭和47年5月15日返還）。だからやらざるを得ない。不在地主の抵抗は無かったけど、在村地主は一定以上の面積が強制買収されるでしょ、そうするとどこの土地を渡すかということでトラブルが起きるわけ。地主は良い所は自分に残したいしね。地主層と小作層があって、調整するためにそれぞれから農地委員が出たんです。

この辺で大きい地主だったのは昔の郵便局長の池田庫太郎さん。山田繁男さんもそうでしたね。二束三文で買い上げて二束三文で売り渡す、これが戦後の農地改革です。

当時は残業なんて、そんなもんじゃなかったね。緊急で農地委員会を開かなければならないとなったら、今のように電話なんて無から連絡なんて簡単にいかない。そうすると手配り。それも1日で配らなきゃならないから、朝一番の汽車で留産駅まで行って、留産、比羅岡を回って戻って留産駅から御園駅で降りて、御園、金山方面を回って、山越えて双葉、中里、花丘、鈴川で配って、鈴川駅で都合よく乗って帰れる汽車があればいいけど、無ければそのまま歩

いて喜茂別まで帰ると、何度かそういうことがあったね。

ただそうなると困ることがあった。普段寝泊りしていた農業会の羊蹄荘っていうのが今の図書室の辺りにあったんだ。昔の新田旅館だな。そこに住んでご飯はクレードルの食堂で食べさせてもらっていたんだけど、そこは夕食の時間が決まっていたから、そんなことして歩いて帰ってきたら当然夜9時頃になるから「金さん今頃になったらご飯はありませんよ。」って言われるし、それじゃ何か買う物が街にあるかっていったら何も無い。統制時代だったし。結局水を飲んで寝て朝を待つという、そういう時代だったね。

一 登記のために測量士補の資格を取る

期日までに登記書類を登記所に届けなきゃならないんだけど、まあ間違ったら戻ってきてまたやればいいんだって言うから、言われるままに書いて登記所に持っていくわけ。まともにパスするわけがないよね。

農地改革の事務では、小作地を買い上げて所有地移転登記までもっていくためには、土地の測量をしなければいけなかった。その測量って言うのが簡単ではなかった。最初は測量士に依頼していた。これには経費がかかるけどね。それでも仕事が追いつかなくて、当時の農地委員会の会長が齊藤末蔵さん、中里の牧場タカラのこの。あの人も測量の経験があったから、そういう人の応援をもらったりしたね。それでも追いつかなくて自分が20歳のときに測量士の国家試験制度ができたから、自分は経験年数が足りなかったから測量士補だけど合格できて、毎日朝早くから測量していたね。小作人の方はぐにやぐにや曲がった畑の隅も「ここまで借りてるからここも測れ。」っていうけど、そんな図面なんて作れるもんじゃない。だからこういう場合は、地主の分と小作人の分とを半分にしてここを境界にするとかした。これもすったもんだして面倒だったけど。そして

測量してみると、番地ってあるでしょ。これが連絡図っていう古い図面はあるけど、測量してみるとそのとおりにならないんだ。

登記所は国の機関だけど、暖房がないんです。そうすると、冬になると関係する留寿都・真狩・喜茂別で燃料を負担してストーブを焚いてもらったりしていた。登記所と棟続きになっている職員の住宅で手続きをしてもらったこともありますね。

登記の仕事は5年位続いたかな。けども、そのうちに農地委員会の職員では自分の身分がはっきりしないんです。役場職員ではないし、臨時の組織であって臨時職員みたいなものだから。それで運動がおこって役場職員になれたんです。

農地改革で小作人達は喜んでたけど、自分なりに考えたときに、ずっと後になって離農して高層住宅を建てるとかよくあるけど、地主だって自分で苦勞して持った土地なんだから。離したくないけども法制度だから小作人にタダ同然で売り渡した。その小作人がその土地を土地ブームで高値でみんな売ってしまった。富士見台だって昔は小作地だったんだから。それが今ではゴルフ場でしょ。この仕事に携わった者として考えさせられるものがあるよね。苦勞して手に入れた土地を、息子が兵隊に行って作れなくなって人に貸す。確かに小作料は入るかもしれない。だけど戦後制度が変わってその部分が小作人に売られて、その小作人が土地ブームに乗ってお金に換えてしまう。だからもう少し国も考えることができなかつたのかなあと思うね。

一 農地委員会から農業委員会へ

農地委員会は、昭和26年に農地委員会と農業調整委員会、農業改良委員会が統合して農業委員会となって、その農業委員会がやった仕事っていうのは、未墾地の開拓、荒れている山、土地で農地にな

りそうなところは政府が買収して希望者に売る。それと、農地交換分合って言うのがあって、分散したり入り組んだ土地の交換とか合併、分割をして無駄を無くしてくんだよ。双葉の奥なんかにかくさんありましたよ。

そういうことを15年やって、昭和37年10月に産業課長になったんですけど産業課長になっても農業委員会の仕事はそこにくっついてたんです。私が課長になったときは30歳ちょっとだから、後志管内一若い課長ができたぞって言われたね。今なら係長にもなれない年齢だよな。まあ大変だった。決断を迫られるしね。それに女子職員は労働基準法で夜10時以降は働けなかったから男子職員が毎日夜遅くまで残ってたな。昭和40年代後半の頃だけけど、総務課長のときに町議会の議案はガリ版（謄写版。ガリは鉄筆で原紙を削る音。）で刷ってたんだ。原稿は係長とか男子職員が作って、ガリ版を書くのは女子職員の達筆な人って指定されてたんだ。だから早く議会が終わればいいなって思ってたよ。

一 戦後初の民選町長のこと

菊地久治町長（第13代村長・初代町長：名誉町民）は厳しい人でした。規律正しい人でした。職員が命令を受けて出張して、帰ってきたら復命するよね。みんなそのまま文書に書いて復命していたけど、復命って言うのはそうじゃないんだと。帰ってきたらまず口頭で概要を復命し、後日書面で詳細を復命しなさいと、そういう人でしたね。当然自分自身に対しても厳しい人でした。それと、役場



菊地久治さん

職員はサービス業だと。人に挨拶するときは先に声を出さなきゃならない。10m位先でもこの人だと思ったら、すぐおはようございま

すと言えるようにならなければダメだと教えられましたね。そういう感じで随分教育は受けましたね。全部助役を通じて部下に指示伝達していましたね。

あの頃偉い人はみんな公職追放令で公職に就けなくて、初めての民間出身の村長だから、中央官庁に行っても町村に何か突飛もないことが無ければ名前が知られない、知られないと色々教えてもらえない。で、何か金をかけないでできないかということでやったのが、国政選挙の投票率の向上。これはお金もかからないし全国に名前が知られるのも早い、喜茂別の投票率が最高になったら喜茂別の名がすぐ売れる。だから、あらゆる選挙で高齢者とか歩いて行けない人を役場職員が車で送迎したり、投票率の各地区対抗競争もやって優秀な地区には褒賞をあげたり。そういう方法をやりましたね。

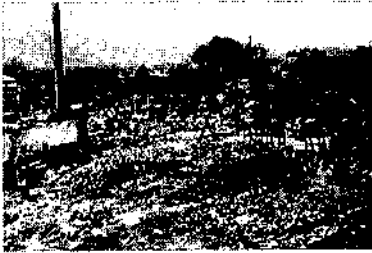
それと、国道 230 号の中山峠が冬季もバスを走れるようにするために、菊地町長は3年間も冬にスキーで峠を越えて札幌開発建設部に陳情に行ったんです。そしてようやく旧道を車が走れるようになったんです。そこまでする町村長はいないよね。普通は汽車で行くだろうから、その辺は十分考えて行動していたんだろうね。

一 喜茂別大火の思い出

昭和 23 年 5 月 11 日に大火があったんです。火元は自分が住んでいた羊蹄荘の隣で、今の消防支署から保育所までの通りから西側は何一つ残らずすっかり焼けてしまった。菊地村長だってその一角に住んでいたから、丸焼けで何も無いんです。それで将校時代の軍靴ぐんかを履いて出勤していました。大火があって自分の家も燃えてしまったけど役場を捨てるわけにいかないから、いっしょに役場に来て指揮を執っていましたね。そして早速中央官庁に行ってお何とか災害復旧をしてくれと陳情していましたね。

旧喜茂別町史より

昨晩・強風下喜茂別に大火
 全焼三百余戸罹災約千名
 北農のドル箱など焼失



大 火



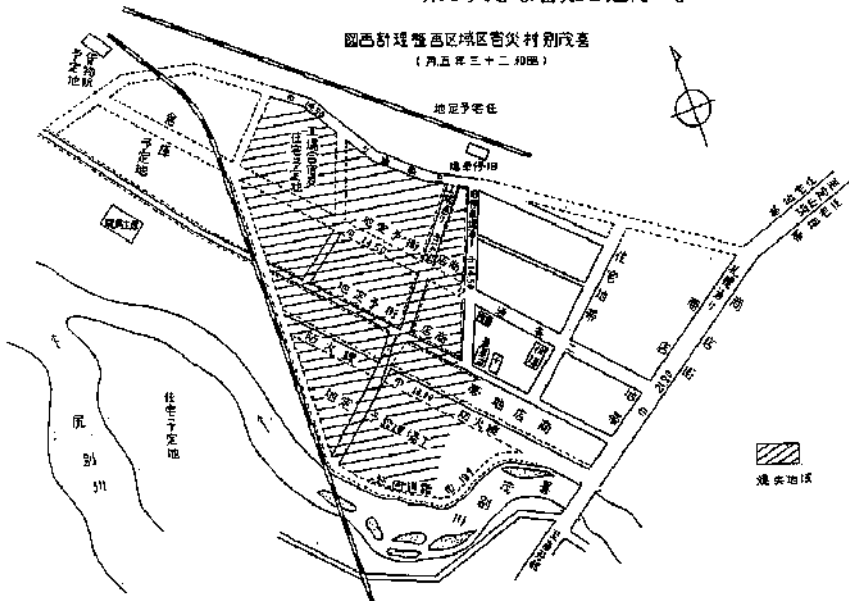
大 火

昭和23年5月11日、喜茂別未曾有の大火を当時の北海道新聞は3段ぬきの大見出しで上記のように伝えた。

5月11日午前2時20分ごろ、理髪業瀬戸田幸次郎宅のノコギリストーブの不始末から発した火は、約2時間のうちに市街の2分の1、150棟317戸を灰じんにした。あっという間の出来事であった。夜が明けて焼跡に立った時、あの火事場独得のにおいのただよう焼け野が原に、残っているのは工場の煙突だけで、柱1本、電柱1本なかった。

敗戦のいた手なお消えず、衣食住に苦しんでいる時期にこの災厄、村は開村以来の大きな苦難を迎えた。

図西町理髪区地区喜茂別村別荘
 (角五三三二和四)



けど災害復旧と言っても資材が何も無いんだから。釘一本も店には売ってなかったから。自分もその当時まだ就職したばかりで若かったから、上の人に命じられて、「小樽のこういうところに行ったら釘を分けてくれるから。ただし、釘は重いから重い素振りを見せたらすぐ警察に捕まるぞ。」と。闇市（非合法の市場）があったから。重くても重く見せないようにと。だから、小樽の駅のホームに出たらすぐ電柱によしかかっただけ。なんともない振りしながらね。

また、罹災者に対する物資が札幌から真夜中の12時頃倶知安に到着するんです。それを農業会のトラックに載せて喜茂別まで運ぶんですけど、自分が一番若いから、運転手と3～4人連れて行って、喜茂別に着くのが午前4時位。もう荷物の中で寝てた。で、今の消防支署の後に商業協同組合の大きい倉庫があって、そこに貯めるっていう作業が3日位続いたんだ。そして一定の期日を決めて物資を被災者に配るんだけど、大騒動が起きたんだ。何であの人にはこういう良い物が当たって自分には当たらないんだと。でも平等に分けるだけ物が揃わないから。来た物を配るだけだから仕方がない。その頃には色々な政党も騒いだんです。

それでもよく復旧したなあ。火災になったら建物はみんな木造だし、屋根も^{まさぶ}桎葺き（台形にした板の厚みのある方を下に羽重ねした屋根）だから、乾燥して丸くなって上向いてるんだから。それだもの火が飛んだらすぐつくよね。自分も外がうるさいなと思って目を覚ましたときには窓から煙がボンボンと入ってきていたから。そのまま布団に服だとか突っ込んで丸めて担いで、役場が今の信金のところにあつたから、役場の当直室に運んで、復旧の仕事に就いたんだ。自分は布団はあつたけど、一般の人達はほとんど焼けたんでないのかな。

余談になるけど、消防には本部に消防自動車1台、ガソリンポンプ1台、腕用ポンプがあつて、鈴川とか双葉、栄、羊蹄の各集落に

も腕用ポンプが配置されてたけど、^{はんしょう}半鐘を叩いて喜茂別の街が大火だと言って、それぞれの地区から台車に乗せて引っ張ってくるんだから。最初のワッシュイで水は出るんだけど、次のワッシュイが出てこない。だからホースの筒先を持つ人は余程の度胸のある人でないと持てなかった。水がなくてホースが焼けてしまうから。遠くは苫小牧からも応援が来てくれたよ。ただ、来ても街の中は道路が整備されてないから入れない。結局、朝までかかって全部焼けちゃった。

残念なことに亡くなった方が1人いたね。役場にいた多田昌二君の姉だった。昔だから防空壕があったから、その中に荷物を入れてて、その監視をやって逃げ遅れたんだね。

役場の庁舎は今の信金の場所にあって、大正6年に分村してからの建物だったから管内で一番古い役場って言われてたんだ。古いだけに雨なんて降ったらその辺歩かれないくらい雨漏りしてバケツだらけだった。

大火の後、復興事務局を作って、役場の議会議事堂に事務局が入ったんだ。復興事務局の職員の方が役場職員より多いんだもの。一般の人達、圃場だとか農協だとか、この人はやってくれるだろうという人が派遣されてやっていたね。そんな状況で議会とかも



公民館

できなくなったから、いの一番に今の商工会がある辺りに公民館を建てて、議会とか会議とかみんなそこでやったね。

そのあと後志のあちこちの町でも大火が起きたね。

昭和35年に念願の新庁舎が建って、他の町村から褒められたもんだったけど、今はまた管内で一番古い庁舎になっちゃったな。

災害に関しては大雨が降ったら幸町第二はよく水害になってた。川底が高くて築堤も満足に整備されていないからすぐ溢れるんだろ。だから、あそこで被害にあった人はかなりいるんでないかな。



新築当時の役場庁舎

一 事務用品が無くて苦労した

昔は機材がなくて、紙だとか事務用品も。それでガリ版でほとんど印刷したけど、最初に書くガリ版はガラスだったから。その上に書くから、それでなくても字がへたくそなのに全く書けなくなるんだ。そのあと鉄のガリ版ができたんだ。今のようにコピー機だとか無い時代だったから、枚数を多く刷るにはいわゆる日光写真だね。ただ天気が悪ければ上手にいかないんだ。図面なんかはそれでは間に合わないから、後志支庁（現・後志総合振興局）まで行ってね。支庁にはいち早くアンモニアによる青焼き機があったから。それで焼いて、帰りの汽車時間のことがあるから感光しないうちにリュックに入れて汽車に乗ったらそりゃ臭いよな、アンモニアが発散されるから。だから随分離れた網棚とかにおいていたね。

それと、昔は算盤^{そろばん}と紙繕^{こよ}り。ホチキスなんか無いから、勤務時間が終わったら、みんな紙繕^{こよ}り^よ抛りか算盤の練習だった。算盤できませんなんていかないから。そういう時代だったね。

自分が喜茂別に来た頃、クレードル興農株式会社は全盛期だね。アスパラって言ったら田辺製菓に怒られるんだ。向こうの宣伝文句はアスパラだから。だから、記念碑とか建ってるけど全部アスパラガスになってるから。このアスパラガスがあったから喜茂別は良かったんだ。傾斜地でもどこでも作れたんだ。それに結構値段も良かったからね、その頃の喜茂別の農家も全盛だったね。だから、後志管内でも喜茂別くらい活気のあるところはなかったよ。そしてそれを加工するのがクレードルの工場でしょ。それには女工さんを年間 300 人位頼んでたようだね。深夜とおして休みなく操業していたから。そして、電蓄っていう鳴り物があったんだ、電気蓄音機。これがかかっていたから、よその町村から来た人から喜茂別って所は優雅な所だなあって言われてたね。

一 給料の遅配もありました

今の人達には昔の暮らしはとてできないだろうな。昭和 22 年に今で言う高校を卒業して 7 月に就職したときの初任給が 420 円だった。その頃ネクタイが 600 円。食堂の食費も 600 円。物が無いとこういうことになるんだ。入った当初給料は 420 円だったけどインフレだったから 1 年に 3 回位も給料が上がったんだ。あつという間に 1,000 円台になってね。けども年末の御用納めのときには役場にお金が無いからまともに給料を払えなかったんだ。それで 12 月 20 日頃から職員全員に滞納者からの税金徴収命令が出たんだ。自分は川上地区が当たったけど、行ったってどこのボンズか分からんよな、相

手にしてみたら。それが税金納めてくれとは何事かっていうようなことだよな。それでも 50 円程徴収して帰ったら、御用納めるときに助役が、「金君悪いけど今月の給料は半分も払えない。年が明けたら残りを払うからこれで何とか正月を迎えてくれ。」って。そんなこともあったね。そのあと地方財政平衡交付金制度（のちの地方交付税制度）ができたから、それで市町村財政も良くなったんだ。悪口だけど、当時『役場職員と学校の先生はやるものではない』って言われてた。安月給だったから。

地方交付税制度ができて、喜茂別には金融機関が無かったから国からのお金を受け取れなかったんだ。郵便局はあったけど取り扱いができなかった。国は四半期毎 4 月、7 月、10 月、1 月の初めにどっと交付金を出すんだ。けど郵便局の他に金融機関が無いから、後志支庁までお金を受け取りに行かないとならないわけだ。それで職員 3～4 人がリュックを背負って行って、支庁でお金を受け取って、役場の金庫に入れて管理していたんだ。だから収入役は金庫番って言われたんだ。だけど当時は物が売ってないから金に対する魅力は一般の人にはさほど無かったんだ。それでもお金だから取られたら困るので、列車に乗ったとき網棚の荷物の下に座らず、ちょっと離れたところにいて、絶えずそのリュックを監視していたんだ。中にはリュックを忘れて駅に降りて、同僚に言われてあわくって取りに行った者もいたんだ。この地方交付税制度ができるまでは、まともに給料は払えなかったんだ。町税だけだったから。

一 こんなこともありました

昭和 27 年頃、助役は教育長兼務の塩谷政二さんだった。そのあと清都勝次郎さん（のちの町長）が樺太（現・ロシア連邦サハリン州）から復員して帰ってきて、菊地町長の 2 期目のときに助役になった

ね。その頃自転車がポツポツ出てきて役場にも必要だとなって、当時5台位買ったかな。それを各課に分担して、使うときには必ず許可を取って、帰ってきたら整備して戻しなさいということだったんだけど、それがそのように管理しないから清都さんがよく怒ってた。途中で酒を飲んでパンクさせたり、ハンドルが曲がったままにしたり。翌日乗ろうとしてもすぐに乗れないよね。これはダメだと言って怒って自転車を売っちゃった。そのあとは自分で苦勞して自転車を買わなきゃならなかった。そして、バスが走るようになったのはかなりあとの話で、留寿都辺りの人は冬は馬櫓ばそりで喜茂別の街へ行き来していたね。これがまた留寿都の人には大変で、馬櫓を改造して古くなったバスの屋根を載せてトラクターで引っ張って雪の上を来るんだわ。トラクターだったらタイヤが広いから道がどんなことになっていても関係なくどこでも引っ張ってこれたから。これがその後トラバス（トラクターバス）と称していたね。しばらくはそういうのを利用したね。街なんて除雪してないから、2階から出入りしないといけない家もあった。屋根の雪は道路に出ず、自然に雪は積もる、捨てる場所が無いんだから。

職員同士の付き合いは今より強かったと思うよ。よく集まって一杯飲んでたね。ただ、飲むといっても酒なんてのは売ってないから、濁酒どぶろくを造って持ってくる人がいたね。税務署には申し訳ないけど。あるとき、農地委員会で北湯沢温泉に行くことになって、酒は何人かが持参することになっていたようなんだけど、急遽持ってこれなくなった人がいて、鈴木上司から「金、伊達に酒を買いに行ってくい。」と言われて、上官の命令だから言われるがままに「はい」と返事をして伊達紋別駅に向かったんだ。酒は配給物で一般には売っていない物だし、私はお金なんて持ってないし、どうしたらいいんだって思いながら駅に降りたら、拡声器で「喜茂別の金さん、用事は済んだのですぐ戻るように。」と放送されてな。もうこれには嬉し

くて言う言葉は無かったな。

一 財政再建団体 (②) の指定を受ける

菊地町長のとき、昭和 39 年に中山峠健民センターとか体育館とか国民宿舎とか色んなものを建ててね。当時は金融機関が金貸してくれるからなんぼでも借りればいって。そして金を借りていろいろなものを建てたんだ。そのうちに道の総務部に分かっちゃったんだ。それで、夕張みたいに昭和 42 年度に準用財政再建団体になったんだ。私は総務課長だったから、7年間の再建計画を立ててね。再建団体になったら、議員には悪いけど、予算は最初に事務段階で計画を立てて支庁の審査をとおって、道で承認得て国で認可。その認可が下りて初めて議会に議案として出すんだから。議会だつて否応なしに議決するしかないんだ。再建中は町長の交際費はゼロだしね。その当時の上の役所というのは物をもらうのが好きだったから。やはり一つの仕事をするためには何かしなければならないから。そのために清都町長は苦労したと思うんだ。それに森林組合長も兼ねてやってたから、町長の名前であちこちから担当者が借りてきたんでないかな。それで町長は悩んでいたみたいだな。そういうお金を使つて、比羅岡から真狩の澱粉工場までの道路の舗装なんてのも、随分かかっていると思うんだ。そういうことで相手に認めてもらう、優先順位を上げてもらう。そんな時代だった。

その再建計画は、幸いなことに日本の高度経済成長によって交付税が増加したことで、7年計画のところ2年で終わったんだ。

※②財政再建団体：収入を大きく上回る赤字を抱え、自力再建できなくなり国の指導・監督を受けることになった地方自治体。現・財政再生団体。

一 町費不正流用事件 (③) のこと

役場に勤めていて、一番の出来事はやっぱり町費不正流用事件だな。昭和 54 年 4 月に収入役を命じられて、前任者の金田勝四郎助役と引き継ぎをしたときに不正融資のことを聞いて、それからあつという間におおやけになったんだ。役場の 1 年分の予算の半分が無かったんだから。一大事件だよ。元に戻すのに。

※③町費不正流用事件：昭和 54 年 5 月、町森林組合等への町費不正流用事件が発覚。

自分が収入役になってすぐ、不祥事が表に出て警察^{さた}沙汰になって。札幌の金融機関とかいろんなところから金を借りていたようだから、私もわからないことが随分あった。「さっき見た警察官がなんでこんなところにいるのか。」と思う位警察からマークされていた。喜茂別の収入役が何かするんでないかって思ってたんだろうな。だけど、やるべき仕事はやらなきゃならないから、役場の中にばかりいられないから仕方ないよな。だからあの年の春の雪解けは分からなかった。朝暗いうちに出かけて夜暗くなってから帰ってくるから。日中なんて外に顔出さないから。そしてようやく今日^{こんにち}を迎えるような格好ができたのかな。

役場の監査は議会から 1 人と一般から 1 人の 2 人で毎月例月出納検査をしているでしょ。その例月監査をパスするのに当時の収入役はどれだけ苦勞したか。逮捕された職員だって好きでやってたわけじゃないだろうし。当時の監査委員も随分風当たり強かったと思うな。

喜茂別の一時借入金限度額は 1 億円と決められているのに、信金から 3 億円も借りてたんだから。そうになったら人間も破れかぶれで、貸した方が悪いんだって言ってたな。最後は北海信用金庫本店にも

頭下げに行ったけど、そのときに信金の代表監事の阿部寅之丞さんに「喜茂別がいくら頼みに来ても（信金の）藤田会長が苦勞することはできない。」と断られたけど、「お前の顔を見たら少し素直そうだな、よし分かった。」ということで58%の支払いで和解してくれたんだ。今考えると、人間が真面目に、苦勞してがんばっていればそのうちに相手に分かってもらえるんだな。この事件が役場生活では一番苦勞したね。

一 総務課長は何でも屋

総務課長だったとき、今の三条通り、あの辺り一角はある会社の土地だったんだ。あの道路を町道にするのに「お前行って土地をもらってこい。」って清都町長が言うんだよ。「寄付してもらってこい。」って言うんだよ。誰が簡単に「うん」って返事するかって。だけどこっちは帰ったら町長に怒られるだろうしさ。だから晩までへばりついてきたさ。そしたらその人のお母さんが、「金さんがやってきているんだから何とか認めてやれ。」ということで行ったその日に許可をもらって、道路の分の測量は町が全部やると約束して、そして帰ってきた。私は測量士補の資格を持っていたから良かったんだ。だけど辛かったね。「もらってこい」だからね。

それから昭和 40 年代の初め頃、これも総務課長のときだな。休山していた日鉄鉦山が再び動きだしたから栄にも警察官駐在所を作らなきゃならんということで、栄郵便局の前に町有地がちょっとだけあったんだけど、駐在所を建てるだけの広さが無くて、その周囲は道南の森町もりまちの人の土地だったんだ。この土地も「もらってこい」だから。これも朝から晩までへばりついて。何とかその日のうちにもらって帰ってきたな。それで栄郵便局の前に駐在所が建ったんだ。この方の娘さんは町内に住んでるんだ。総務課長っていうのはどこ

にも所属しないことは全部やらなきゃならないからね。

自分が総務課長になる前は、総務課長候補がたくさんいたんだ。それがどうしたのか札幌に行ってラーメン屋始めたりとか、3人位出て行っちゃった。それで人がいないから、少し若かったけどお陰で総務課長になれたんだ。

当時字を書けない高齢者って結構いたんだ。特に、戸籍関係の書類は、自筆で書いて申請しなければいけないから。窓口はたいてい女子職員だから、「代わりに書いてほしい」と頼まれても「規則がそうなるからそれでは困ります」となるよね。「書け、書けない。」で最後には喧嘩になるんだ。そして職員から「課長どうしますか。」って聞かれるし、高齢者の方は大きい声出して「役場職員は不親切だ、管理職出せ、町長呼べ。」とか騒ぐし。だからなだめて、本人は字は書けないけど、その人間には間違いないから「出してやれ」と職員に指示したというのがよくあったな。そういう字を書けない人でも何故かソバイクの免許は取れたんだ。

税金関係は厳しかったな。滞納者が多いわけさ。だからそれをもたらいに行くとかあだこうだって言われて馬小屋で口喧嘩した挙句に馬糞の上に転ばされたってこともあるし。鉄砲打ちの家に行ったら「そんなこと言うと打つぞ」って言われて一目散に駅に走って逃げた職員もいたな。

今では考えられないだろうけど、戦争が終わって復員して戻ってきたでしょ。そしたら、農家の次三男対策っていう制度ができたんだわ。この人達をどうするかっていう制度。今なんか人が足りなくてどうするって言ってるのに、余った奴をどうするかっていうんだから。そのうちに声が潜んじやったな。ほとんどが都市に出て行っ

たんだ。お金をたくさん持っている人はほとんどが札幌方面、まだ頑張らなきゃ食べていけないっていう人は室蘭方面に行ったな。今現在の喜茂別の農家の数はしれてるよな。昔はアスパラガスがあったから。小さい規模でも傾斜地でも採れたからな。今はトラクター時代だからな。条件の悪い畑に機械は入れないからな。

一 宮様との思い出

運がいいのか、よく宮様には会ったことがあるな。

札幌冬季オリンピック（昭和 47 年）があったとき、皇太子殿下（今上天皇）がご臨席されるってことで、何故か喜茂別方向から札幌に向かうことになって、道警から「皇太子殿下がお通りになられるから通る車は全部止まってもらうように頼め」と指示されてさ。札幌方向から黒塗りの立派な車が来たから止めたんだ。そしたらおもむろに窓から顔を出して「何やってるんだ」と言われたからその通り説明したら、「何？皇太子殿下？私の甥っ子だろ」って。「けどそんなこと言ったらお前ら困るから、分かった。」って止まってくれたんだ。後で気が付いたんだけど、^{たかまつのみや}高松宮様（^{のぶひとしんのう}宣仁親王）だったんだ。

それから、聖火リレーのとき「お前出れ」って言われて、町民公園から町外れまで聖火を送ったなあ。6人位だったかな。

そのほかにも、中山峠公営企業の施設ができたとき、全国日赤奉仕団の青少年奉仕団の大会をやったことがあったんだ。奉仕団の会長は^{ひたちのみやはなこ}常陸宮華子妃殿下で、前の日に町長から「金、明日こういう偉い方がお見えになるからお茶菓子を用意しておけ。」と言われて、すぐ札幌の千秋庵まで行ったら、店長が「お菓子は色々あります。しかし、あなたに持たせるわけにはいきません。明日、どこに何時にと言われたらうちの職員が間違いなくお届けいたしますから、そ

のようにさせてください。」と言われたね。そりゃそうだよな。安全上持たせるはずがないよな。お茶を出す人も前もって指定しなきゃいけなかったんだ。そのときは女子職員を指定したんだ。

またこんなこともあった。昭和42年10月に、中山峠に げんにょしょうにん 現如上人
(東本願寺第22世法主・大谷 おおたにこうえい 光瑩) の北門開拓記念像を建立するとき。東本願寺だから、京都の東本願寺の住職 (第24世法主・大谷 こうちやう 光暢) の奥さんで、こうじゆん 香淳 皇后の妹で大谷智子さんという方がいたんだけど、ある日あそこを通ることになったわけさ。視察にいらしたんだろうな。総務課長の私は、あの銅像を建立するときの常任理事だったんだ。そして日曜日に札幌の東本願寺の担当者から、「金さん、こういうことで通るから、峠の売店で顔だけ出してもらえないか。」と。それで行って見たら、来たのが黒いベンツでね。付き人が付いていたんだ。これはちょっと、偉い人間だなと思ってね。それで峠の10円の缶ビール、ジュースを出して「飲んでください」って言ってね。蕎麦もあったけど、蕎麦は食べなかったな。ジュースは飲まれたけど。で、洞爺の方へ帰っていったんだ。役場に戻って清都町長にその事を報告したら、まあ怒られた、怒られた。「そういう偉い人が来たのに町村長が顔を出さない町村なんてないぞ」と。まして清都町長のお寺さんは東本願寺だったから。「だけど上の方がこう言ったから」と言っても「上の方が何と言ってもお前は常識が無いのか」ってね。まあ酷い目にあつたな。

町長を辞めるころかな。ひげの殿下、みかさのみや 三笠宮様 (ともひと 寛仁親王) から昼頃電話を頂いてね。「町長、私、中山峠に遊びに行くから。何時の飛行機で千歳空港に降りるから町長の車貸してくれ。」っておっしゃられてさ。運転手と千歳にお迎えに行ったら「町長、昼食食べたか。」と聞かれて、「いえ、食べておりません。」と答えたら、宮様は付き人の方に「おい、喜茂別の町長が昼食食べてないからす

ぐに生寿司注文しろ。」と言って、千歳空港の貴賓室でご馳走になってさ。食べた後てっきり町長公用車に乗るものだと思ったら、お忍びだし何かあったら問題になるからということで、殿下は札幌スキー連盟のおんぼろのライトバンに乗られて、スキーを町長公用車に積んで、この道をこのように通ってくれと指示されて先導して走ったんだ。2泊位中山峠に泊まれたのかな。いくらお忍びでもさすがに道警は察知していて、峠のスキー場宿舎の宮様の宿泊部屋の手前で監視さ。事件事故があったら大変だから、警察もゆるくないよね。



町長時代

たかまつのみや のぶひと
高松宮 様（宣仁親王）もよくお忍びであちこちにいらしたみたいだな。総務課長の頃、中山峠のスキー場にいらしたんだ。「課長、どうしてこのスキー場は私が滑ろうとしたらみんな居なくなるんだ。私がリフトに乗ったら滑ってくるし。あの若い人達と一緒に滑ってみたいのに。」っておっしゃってたな。

一 交付税算定のこと

昔は支庁に報告するにも手紙、文書だからね。でも今はメールでしょ。地方交付税の算定事務にしても、今はコンピュータだから手で計算しないでしょ。昔は管内の町村を1週間位俱知安に集めて試算をやったんだ。そして全部計算して国に結果がいて、国は予算どおりになるかどうか、国の予算に合わなかったらどこか削らなきゃならないから。そうやって本算定をやったんだ。俱知安の福井旅館に1週間泊まってな。計算も、当時は手回しの計算機だったけど持ってる町村はまだいいさ。無い町村は算盤だから。算盤で小数点の計算はゆるくないんだ。人事異動で担当が新しくなったら計算

も時間かかるんだ。そしたらずるして隣の留寿都だとかに見せてもらって写すんだ。そして支庁の審査受けたら「どうして留寿都と同じ間違いするんだ。」って言われてな。「世の中には考えが同じ人がいるんだ。」って誤魔化したりしたな。

一 退職後は自由気ままに

退職した当時、年金はすぐ支給されたんだ、今と違って。退職して10年位は、ほぼ全国を旅行したな。行ってないのは佐渡島と海外くらいだ。それは全部夫婦で行ったんだ。

現職のときは、高齢になったらみんな老人クラブに入りなさいってPRしたけど、なんせすぐ会長とかそういう役を推そうとするんだわ。神社もそう。だから私は坂を登れないからダメだって断ったら顧問で名前だけでもって。そういうのが嫌で、申し訳ないけど老人クラブには入らなかったんだ。



奥様・幸子さん（右から2人目）、ご友人達と
（平成13年4月27日、静岡県^{すまたきょう}寸又峡にて）

一 後輩達へ

自分は上司に不平不満を申したことはまず無かった。同僚達との争いも、することはほとんど無かったよ。人間関係は「短気は損気」と言われていたから、ゼロとは言わないけど楽しく過ごせたね。

人間には必ずというほど、運、不運が付きまといっていると思います。けども、努力は必ず報われます。何事も諦めずに最後まで粘り強く頑張ってください。



昭和63年6月横路北海道知事を囲んで
後志支庁管内市町村サミット（後列中央）



人と自然がきらめく町

きもべつ